

ビラーン通信

25号

医療費節減できました

ー 対象コミュニティは拡大、経費は縮小 ー

この3月の現地訪問時に、CMB クリニック担当ジョジョから、医療支援金の使途報告(12月末までの暫定支出ですが)を受けました。月平均経費をみると、前年度に比べてかなり節減されていました。

支援対象コミュニティの数が増えているにもかかわらず、経費が減少したのは、たまたま公立病院で対応できないような重い症状の患者が出なかった(特別枠で支援したネフローゼ症候群のレオポルド君を除いて)という幸運とともに、下記の医療衛生事業の成果がようやくあらわれたと考えることができます。

経費節減は、以下のように今年度の医療費予算、送金月額に反映させる予定です(6月総会で詳細決定)。

＜平成12年度送金額：月額950ドル/約10.5万円 → 13年度予算案：850ドル。

内訳：44%が医薬品購入費、38%が助産婦1名、ヘルパー7名の給与 ＞

- | | |
|---|--|
| 1 | 簡易水道建設(支援対象の約半数、7コミュニティで安全な飲料水確保) |
| 2 | 薬草の栽培・利用の奨励 |
| 3 | 野菜栽培指導や回虫駆除による子どもたちの栄養改善(回虫20匹が極度の栄養不良の主因とわかった子どももいました) |
| 4 | 巡回診療、コミュニティ配備常備薬による病気の早期発見、早期治療(交通条件から、一度も巡回診療を実施していない地区もあります) |
| 5 | 低所得者対象の公的入院費補助制度の利用(地区のバランガイ・キャプテン/村長の証明で、公立病院入院費の75%が免除されます) |
| 6 | CMB 対象地域内医療互助制度(グリーンカードシステム)普及 |



薬草園の手入れをするアトゥモロックの教師兼ヘルパーのレスリー

以上のほか、日本から持参の寄附医薬品も経費節減に役立ちました。

ー ジョジョのCMBクリニック日誌(平成12年12月～13年2月分)より抜粋 ー

*12/1: 3日前から高熱と吐き気があったボルールの5歳の男児。病院での検査後、薬処方。

*1/3: 右わき腹に銃創を負ったサムラングの男性(38歳)が病院で手当てを受けた。

*1/19: 2週間前から頭痛と高熱を訴えていたキアミの15歳と37歳の女性が、マラリアで入院。

*2/4: 木から落ちて右ひじを複雑骨折したトカブラオの10歳の男児が公立病院で手術。

*2/10: カラバオ(水牛)から落ちて腹部強打のサムラングの8歳男児。公立病院で手術、2週間入院。

*2/22: やけどで運ばれたチボリ町モンゴカヨの2歳の女児、公立病院で治療。

＜その他の報告から＞ ① 病院で治療を受けた患者数(平成12年): 合計81名。うち入院は24名でいずれも快癒して退院。手遅れで子ども2名が死亡した前年と異なり、死亡はゼロです。

② 巡回診療: 12月にチボリ町ルヒビで実施(患者128名) ③ コミュニティ配備常備薬利用者(報告のあった5地区合計): 3ヶ月で193名。咳83名、続いて頭痛、発熱、結膜炎、下痢が主症状。

* * * * *

＜奨学生から初めて、医療従事希望者ができました＞ 2名が、カレッジの助産婦コースを志望しています。

＜子ども医療基金で、緊急のニーズに対応＞ 通常の医療支援減額に対し、緊急のニーズには、レオ君支援金残高に加えて積み立てている子ども医療基金で対応の予定(3月末残高2万円)

＜モロイイスラム教徒のクリニック訪問＞ 貧しいイスラム教徒が住むG.サントス市街地に、設立半年の小さなクリニックを訪ねました。責任者は、イスラム系サギル族の看護婦ナブサリタさん(平成10年度総会で講演をお願いしたアガさんの妹)で、鍼灸も採り入れた新しい試みが注目されます。同じ少数民族医療に取り組むNGOとして、今後情報交換などの交流が期待されます。